吉原幻想(仮)

緋羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
吉原幻想（仮）

【Ｎコード】
Ｎ８２４４Ｙ

【作者名】
緋羽

【あらすじ】
過去作品を加筆修正し、新作としてここに掲載させていただいております『吉原幻想草紙』。
過去作ではない本当の新章を書き上げましたので、こちらの（仮）に載せておきます。
ページ分けしておりませんので、読みにくかったらごめんなさい。
本編に添付した時点で（仮）は削除してまいりますので、もしも意見要望感想などございましたら、本編『吉原幻想草紙』の方へ書き込みお願いいたします。

流転の百姿に魅せられて

はだけた着物を直そうとしたその女は、真剣な眼差しで筆を握る男からの叱咤を素直に受け入れ、肌が卑猥に露出したままの格好で姿勢を変えた。

男は美人画を描くため、女に様々な体位を要求する。と言ってもまぐわるための体位ではなく、あくまで絵を描くための資料として、目の前にある女体を見ては筆を動かしているのであった。

見る人が見れば二人は”できている”と思うものかもしれないが、何の事はない、遊女と客、ただそれだけの関係であり、それ以上の緊密さはまるで無い。

ヒラリと落ちる紙一枚。遊女は姿勢を解き、固くなった身体をほぐすように四肢を動かしながら、落ちた紙を拾い上げる。

「あら、愛らしいえ」

描かれているものは紙いっぱいの真ん丸い月、空へと跳ねる玉兎、そして、鎧に身を包み棍棒の様な物を頭上へと掲げる、黄金色に輝く猿。

「こなたのお猿さんは何だえ?」

彼女の顔は主張せず控え目な紅化粧が施されており、その唇は男が好むような派手な色ではなかった。代わりにくすんだ赤茶色の紅が引かれている。

幻想吉原の大見世・松葉屋、そこに在籍する女郎の中でも特に上位、いっそのこと最上位と言っても差し支えないほどの人気女郎、夕霧太夫。

はだけたままの着物をふんわりと羽織る動き一つですら、男を魅

了する”科（しな）”にも勝る優雅さがある。

彼女の問いに答える男の名は、芳年。流れの浮世絵師である。
「動くなと言ったろう。
これは月百姿の一枚。異国に伝わる伝説上の妖猿、つまりは化物を描いたものだ」
万物は流転し、存在する個々が異なる百姿を持つ。月の姿を一つ切り出したとしてもそれはまた百通りの画を映し出し、魅せられた絵師はその画を絵にとどめる。ゆえに月百姿。

「まあ、恐ろしい」
夕霧は「恐ろしい」と言いながら、猿の逆立つ毛並みを整えるかのように絵を撫でた。
表面に指を乗せ、そのまま端まで滑らせる。指先をするりと紙の裏側へと忍ばせ、軽い力で持ち上げようとした。
「痛っ……」
指の腹に浮き上がる薄い線。そこから鮮やかな赤色が徐々に滲み出し、玉となって妖猿の眼に落ちる。

芳年はその絵を拾い上げて眺め、フッ…と息を零す。ため息なのか、はたまた笑っているのか、夕霧にはわからなかった。
「兎の眼は黒、猿の眼は赤…か。
妖猿ならぬ妖艶の猿…、悪くない」

赤眼の猿を見て小さく息を吐いた夕霧に気付きその顔を見つめていると、彼女もふと顔を上げて彼を見た。吸い込まれそうなほどに黒く、美しい眼差しを彼に向けた。
「赤眼の猿は気持ち悪いか？」
「いいえ、まるで世の理を見透かしたかのような冷たい眼差し……。
まことに滑稽でありんしょ」

ポタリ…、ポタリ…、と血を垂らしたままの彼女に言う。
「月百姿が一枚、『妖艶・孫悟空』。
お前が完成させた絵だ、死ぬまで持ってな」
芳年は夕霧の指に流れる血を舐めとり、孫悟空の絵を持たせた。

「さあさ、さっさと姿勢を立て直せ。いつまで経っても描き終わらんだろう」
「浮世絵も良いでありんすが、ぬし、抱いてくんなまし。
紙を撫でるなら髪を撫でなんし、筆を動かすならばわっちの身体の上で動かしてくんなまし」
拗ねた様に言葉を続ける。
「ぬしの前で何度も裸になっていんすが、ぬしは一度も、わっちを抱いてくりんせん」
色っぽい仕草でぼやく。

夕霧ほどの遊女と一夜を共にするのなら、何度抱いても抱き足りぬと思うのが普通の男であろう。
しかも女の身体を売り買いできるのが廓であり、高い金を支払ってまで得た女体を眺めるだけ眺め、その行為だけでいたずらに時間を浪費するなぞ愚の骨頂。しつこいようだが、そう思うのが健全な普通の男というものである。

芳年の場合、絵に熱中している間はその気にならないようだ。
「博奕打ちが博奕に熱中している時、女の事など考えないのと同じだ。
お前は確かに美しい。だがその美しさ、絵の中でこそなお映える」
夕霧は喜ぶでも悔しがるでも無く、優しくただ微笑みを浮かべるだけであった。

＊

いつものように夕霧を買い、筆を動かす芳年。そんなある夜、騒々しい足音と声が廓に響いた。そして下品な笑い声と共に、部屋の戸がガラリと開かれる。

数名の男ら、従者か見世の雇われ夫なのかはわからないが、彼らに制せられながらも部屋に入り込んでくる赤ら顔の男。

「おお夕霧よ、今夜も卑猥な霧の夢を魅せているのか？ガハハハハ！ああ？情事も無しに紙なんぞ広げて一体何をしているんだてめえらは。

……ああ、なるほど。太夫様ともなると客の嗜好も上品なものになってくるもんなのかね。

くくくっ…、ぐはははは！！！」

一人で大笑いしている男を押さえ、申し訳なさそうに何度も頭を下げる男たち。

「大虎退治、大変でありんしょ。ご苦労でありんすえ」

夕霧がかけるねぎらいの言葉になお頭を下げる彼らは、太夫とその客の顔を見ないように気遣いつつ下がって行った。目が合って気まずい思いをさせてしまわぬよう、最低限の配慮を示したのであろう。

「なんだあの酒狂いは」

「籠に鍵する虎男、その人でありんす」

夕霧は虎、つまり今しがた乱入してきた酔っ払い男のことを簡単に説明した。彼こそが松葉屋楼主・草嶋である。

草嶋は見世の女を心身が壊れるまで厳しく働かせ、徹底して金を稼がせていた。そして経営が軌道に乗り、自分が不自由無い暮らし

をできるようになった後は、松葉屋の管理を遣り手の瀬川に任せて、当の本人は面白おかしく遊び歩くようになった。

今のような礼儀知らずな行ないも、ここを自らの城と思い込む彼にとってはおそらく気に病むような行為などではなく、まさかそれが迷惑行為だなどとは微塵も思っていないことであろう。

芳年は新しい紙を取り出し、墨汁を水で薄めたものに筆を付け、興味深げに見つめる夕霧の前で一気に動かす。

下から上に伸びる一本の線、その幅は親指の約一本分。墨のつけ具合を調整したのか、上下に伸びる線の右と左では、色の濃さが違って見えた。その線の中へ等間隔に、細く濃い横棒を入れ、数カ所に笹の葉を付け足す。いつの間に出来上がったのか、そこには力強さ溢れる見事な竹が描き出されていた。

横の白紙部分に墨を落とす。濃淡の変化をつけながら縦へ横へと器用に筆を動かし、ものの数分で描き上がる獣の絵。それはまさに生きているかのような、雄々しい虎であった。

一頭の虎が笹の横で天を仰ぎ見る。描かれているその表情は恍惚であり、まるで空を見上げてうっとりとしているようでもあった。

「酒(さけ)の隣に虎が在り…、」

背景に淡い色で円を描き、水でさらにぼかしを入れる。

「月百姿が一枚、『月見る虎図』。

荒れ狂うよりも静寂に身をやつす虎。やはり絵に収めた方が映えるな」

その絵は嫌だとでも言うようにそっぽを向く夕霧に、芳年は墨を擦りながらひとりごちた。

「時に遇えば鼠も虎となる、か。
時に太夫よ…、」
新しい紙にサラサラと文字を書きながら、夕霧に告げる。
「ここでのお絵描きは今夜で終わりだ。今までの礼に、旨いものでも喰わせてやるよ」
タンッ、と筆で点を打ち、その紙を差し出した。

手に取って見ると、そこには達筆な字で『夕霧』と書かれていた。
「揚屋差紙のつもりでありんすか？
名を書くよりも体を描いてくんなまし」
「美人画か？」
「いいえ、鯉の絵を」

夕霧は筆を一本取り、自身の名が書かれた紙の空いている部分に、小さな鯉の絵を描いた。
「わっちの体は鯉…、くすんだ彩で優雅に泳ぐ、変わりの茶鯉でありんすえ」

微笑んで紙を返した。芳年は受け取ったその紙を懐にしまい、背を向けて布団の上に寝転がる。
「風邪をひきんすえ」
着物を脱ぎ捨てて自らも横になり、背中から包み込むようにして芳年を抱きしめる。そのまま共に、静かな寝息をたてて眠る二人であった。

後日、松葉屋には揚屋差紙が届けられた。その差紙には、立派な茶鯉の絵が描かれていた。

＊

シャラン…、シャラン…、と一定の間隔を刻む音と共に、ゆっくりと歩みを進める一行。酒に呑まれた飲んだくれも、その華やかさを目の前にするとさすがに息を呑む。
改めて再確認させられる。それが花魁道中であり、ここが花街・吉原である、と。

箱提灯を持ち、一行を先導する男衆。その後ろにはまだ幼さの残る禿や妹女郎を引き連れ、秀でた魅力を存分に醸し出す女が一人。
底が厚い黒塗りの三枚歯下駄、その重さを感じさせぬ、流れるような外八文字で足を前に出す。

一歩一歩、ほんの少しずつ前へと進み、そのたびに頭の飾りがチロチロと揺れていた。
枝垂れ柳のように揺れるそれが、明かりを反射して眩しく光る。だが、それすらも霞んで見えるほどの圧倒的な容姿。

「よっ、夕霧太夫！」
囃し立てる声があちらこちらから飛び交っている。声に応えるように、ゆらりと視線を流す夕霧太夫。
一見するとけだるいその目元は、目が合う者をザワリとさせるほどの、気高い視線を生み出していた。

花魁道中とは、花魁が自身を指名した客の待つ揚屋へ迎えに行くことを意味する。その揚屋では、飲食の宴を催すための座敷が準備されていた。
この場合の客とは芳年のことであり、花魁は言わずもがな、夕霧太夫のことであった。

＊

山のもの、海のもの、豪勢な料理が様々に並ぶ宴席で花魁は馴染みの客の隣に座り、赤漆の徳利から酒を注ぐ。
芸妓の舞や太鼓持ちの余興を楽しみ食事も一段落ついた所で、客である芳年の意向によって他の者は座敷から去り、二人静かに酒を呑んでいた。

徳利と同じ赤漆の御猪口を傾ける芳年。その中身をクッと飲み干したのを見て、夕霧は再び酒を注いだ。
「お料理の味はどうでありんしたかえ？」
「この酒が一番旨いな」
「あらまあ、わっちにも呑ませてくんなまし」
「フッ…」
持っていた御猪口の酒を口に含み、徳利を受け取る。

御猪口を持ち上げ嬉しそうに差し出す夕霧であったが、芳年は手にした徳利を足元に置いた。そして、そのまま接吻した。
唾液と混ざり合いほのかに甘みを増した酒が、口から口へと流れ込む。合わせた唇の隙間から液体が零れ、夕霧の首筋を伝って胸元を濡らした。

「お前の唇は茶色いな」
赤茶色の唇をそっとなぞり、それ以上の行為を避けるかのように身体を離す。
夕霧は襟元を若干開き、濡れて光る胸を指先で撫でて笑みを溢した。その笑みには、くらりとする色気があった。

「冷たいでありんす。
熱い燗を頼みんせんかえ？」
「それも良いな」
夕霧はまた笑って、芳年の首に腕を回した。

＊

熱燗を数本飲み終えた時、襖の向こうから声がかかった。
「料理頭でございます。入ってもよろしいでしょうか」
頷く客に応え、遊女が了承の返事を投げる。
「失礼いたします…」
カラカラカラ…と静かに開く戸の向こうには、正座して前かがみになり、しかし顔だけは真っ直ぐこちらに向く男の姿。
膝の上で硬く握る彼の手には、鈍い光を放つ包丁があった。

音も無く立ち上がり、室内に入り込む男。怪訝な表情を浮かべはしたが怯む様子は微塵も見せない二人の前に歩み寄る。
「初会…で、ありんしょうか」
少なくとも夕霧が知る料理頭ではないその男に、笑みを絶やさず言葉をかけた。

「こうして話すのは初めてですがね、わたしはいつでも見ておりましたよ。太夫、あんた様を」
「見ていんした？どこから…？」
「どこからでも」
不敵に笑う男を見もせず、芳年はわずかに残っていた御猪口の酒を飲み、ひとりごちた。
「変態野郎か」
男は芳年に顔を向け、鼻で笑って言い放つ。
「女も抱けない絵師なんざ、春画で千摺りに励んでろや」

夕霧に包丁の刃を向けたまま近付き、その頬にそっと触れた。畳を擦って動く音が、静かな室内に不気味に響いた。
「お前の唇は茶色いな、か…。

ああ、太夫…。汚らわしい絵師なんぞに接吻されてさぞや気味の悪い思いをしましたでしょう。
すぐにわたしが清めて差し上げますから…」

唇を卑しくくっ付ける。唾液でぬめりと光る舌を出し、茶色い紅を舐めとった。
「茶鯉の味は美味でごぜえますな」

一方的な想いをとめどなく溢れさせ、べろべろと顔を舐め回す。その間も男の手には硬く握られた包丁があり、だらしなく開けられた女の胸元にヒタヒタと当てたり、柄の部分をグイと押し付けたりしていた。
そんな行為を受けている女は別段表情を変えることもなく、ただ、男のしたいようにさせているだけであった。

コト…、と静かに御猪口を置く芳年。男にのしかかられ、されるがままの夕霧に問う。
「どうするんだ？」
ニコリと笑い、答えた。
「どうもしやんせん。どうにかするほどの大事じゃありんせん」
「は…？」
男は動きを止め、女の真意を知ろうとしてまじまじと顔を見る。

「塵や埃がまとわりついているだけ。ササと払えば終わりでありんす」
「塵？埃…？なに言って……？」
信じられないという顔つきでたじろぐ男に冷たい眼差しを向け、吐き捨てる。
「クズには意味がわかりんせんかえ」
ニコリと微笑んだ。残酷なほどに美しく。

「て、てめえぇぇ…！！！」

バシッ…！！！

平手で叩く音が生々しく響いた。

何かが畳の上に落ちて、芳年の足元へと転がった。

「てめぇ、太夫だからと調子くさりやがって！結局は下劣な遊び女じゃねえか！！！

人が下手に出てりゃあ付け上が……！？

ソレは何だよ…、てめえは一体……！？」

頬を打たれて一瞬うなだれた彼女は、ゆっくりと顔を上げる。そして再び男を見据えた。見慣れぬ赤眼…、残酷なほどに美しい、赤茶色の眼で。

「ば、化け物……！？」

芳年は足元に転がってきたものを拾い上げた。それは夕霧の目から落ちた、魚の鱗を加工した瞳隠しであった。

懐から筆を取り出し、ゆっくりと立ち上がる芳年。筆の先端を捻り、ポロリと外れたその中から出てきたのは、鋭く尖った錐（きり）。

「尖刃器というのは何かと便利なものでな…、」

ズグッ…。

「ギャーッッッ！！！！」

鋭く尖った先端を、男の右目に突き入れた。

「先の部分に色を乗せると、変わりの筆にもなるわけだ」

錐を抜き取りそこに付いた薄茶色いの液で、取り出した紙に輪郭を描き始める。

泣きわめきながら右目を押さえる男の肩に、再び突き立てた。

「うあぁあ…！！　だ、太夫！
こいつは　、一体何なんだよお…！！！
た…、助け……、」
男は痛みで意識を失いそうになりながらも、ギリギリ倒れずにいた。しかし、助けを求めようと差し伸ばした手を振り払われ、夕霧がやや離れたため、前のめりに倒れ込んでしまった。

「赤い眼をした異形の化け物、わっちは変わりの茶鯉でありんすえ」
「まさ、か…、
い、異人…、だったのか……」

大勢の人間がひしめいて生活するお江戸にも、中には他と異なる容姿で生まれる者がいる。
例えば四肢が欠けた者、または五感の足りぬ者、単純に見てくれが奇形である者。そして彼女のように、他と同じ黒髪黒眼を持たぬ者もいた。
そうした者たちのことを、人々は恐れと侮蔑を込めて、異人と呼んだ。

「けれどこちらの絵師様は、化け物を描く化け物ですえ」
「だれが化け物だ」
「あら、これは失礼しんした」
倒れこむ男の背中を突き刺し、ギギギ…と動かす。その動線に沿って、鮮血がジワリと滲む。

「ぐわあぁ……っっ！！
も、もう…、許してくれえ……！！！」
構わずに、尻、太もも、足裏へと、次々に刺してはその血で絵を描いていく。その度に悲鳴と嗚咽が漏れた。

足で転がされ、男は呻きながらごろりと仰向けになった。
芳年は落ちていた包丁を拾い上げ、寝転がるその腹部を右から左へと容赦なく切り裂く。

声も出せず喘ぐ男の腹から飛び出した血は、芳年の着物を赤黒く染め上げた。
その色をも絵に乗せて、着々と仕上げていく。輪郭部分のどす黒く変色する血を、別の筆の毛先でぼかしながら。

出来上がっていく絵をチラと見て、男は無理に笑って媚びた。
「あ、ああ…、
素晴ら、しい絵じゃ…、ねえですかい……」
芳年はギンッと睨み付け、涙溢れる左目に筆の毛先を突っ込み、グリグリと回した。
「クズに見せる絵なんかねえよ」
「ギヤァァァァ……ッッッ！！！！」

＊

数刻後、返り血と汗を垂らし、ダラリと腕を下げた芳年に夕霧が問うた。
「出来上がりんしたかえ？」
舟上できらびやかな衣装を身に付け優雅に佇む遊女、その周りには男の体液と血で彩られた髑髏の群れ。灯籠が流れる川には、力無く揺らめく月明かりが反射している。

芳年は男に近付き、微動だにせぬ口元を覗き込んだ。そしてその唇に錐を刺した。そのまま絵を持ち上げ、錐先で絵の遊女の瞳に色を重ねる。

夕霧から舐めとった赤茶色の紅と男の血が混ざった、気持ちの悪い眼色の美人画が完成した。

男の顔に、ハラリとその絵を落とす。

「月百姿が一枚、『地獄太夫悟道の図』。

お前が完成させた絵だ、死ぬまで持ってな」

言われた男は、すでに死んでいた。

＊

夕霧は目に鱗を入れ、黒い眼に戻る。着物や髪の毛の乱れを整えながら一人、芳年との別れ際に交わした最後の会話を思い出していた。

「また逢おう、地獄太夫」

「恐ろしい名でありんすね」

「天国の方が良いか？」

ゆっくりと首を降り、赤茶色の眼で芳年を見る。

「地獄に勝る苦しみも天国に勝る幸せも、全てはこの世の中にありんすえ」

「フッ…、異人に地獄も天国も無し…、か。

苦労するな、お互いに」

芳年は笑い、闇の中へと消えて行った。

＊

御用聞きが駆けつけた時、その部屋には無残な死体と美麗な太夫しかいなかった。

太夫に尋ねても、

「わっちはなんにもわかりんせん」
の一点張りであり、御用聞きはほとほと困り果てるだけであった。
一人が死体の顔に乗った紙に気付き、何気無く持ち上げて見る。
一瞬驚いた顔を見せたが、息を吐き、呆れたように周りの人間に廻して見せた。
絵を見た彼らは皆一様に同じような反応を示し、その中のある者がポツリと呟く。

「血まみれ魅斎……」

見るものを捉えて離さぬ、残酷な魅力を醸し出す絵。人の血や体液すらも材料にして描き上げる、流れの浮世絵師。
死絵を描く為に人を殺すこともいとわない、芸術に魅せられた殺人鬼。

ゆえに、ついたあだ名が『血まみれ魅斎』。

これはただの噂であるが、血まみれ魅斎の正体は、実は異人であるらしい。

羅生門にて鬼と戯れ（前書き）

［陰間の章］

琥珀（こはく）…陰間茶屋『薄迦園（はっかえん）』の陰間。

弥勒（みろく）…陰間茶屋『薄迦園（はっかえん）』の店主。

一八（いっぱち）…幇間『狐座（きつねざ）』の太鼓持ち。

狐彦（こひこ）…幇間『狐座（きつねざ）』の道化師。

喜衛門（きえもん）…大見世『松葉屋』の妓夫（ぎゅう）。

六左衛門（ろくざえもん）…河岸見世『空蝉楼（うつせみろう）』の妓夫。

華澄（かすみ）…河岸見世『空蝉楼（うつせみろう）』の女郎。

羅生門にて鬼と戯れ

年端もいかぬ童の腰をぐいと持ち上げ、脚を開くように促す女。油で濡れた人差し指を固く閉ざされた秘所へゆっくりと押し入れた。

長いまつげに飾られた大きな瞳は芯の強さを表すような艶な光を留め、息を荒げる童の顔を瞬きもせず見つめている。その眼で見つめられた童は、意に反して自分の一物が固くなるのを感じた。

若き陰間・琥珀の仕込みは、まだ始まったばかりであった。

＊

最近は専ら外を眺めていた。

店を抜けて本当の意味で自由に外を歩きたい、その気持ちが全く無いと言えば嘘になる。だが、ただ眺めているのが楽しい、その思いもまた事実であった。

現実とは違う幻想の世界を垣間見られる気がして、いつもそうやって外を眺めていた。

堺町、葺屋町などの芝居町が近い芳町（よしちょう）では、下っ端の若い歌舞伎役者が副業で陰間として、つまり男が男または女に色を売って稼いでいた。

それだけではなく、花街・吉原と同じく様々な理由で売られた童も多数、陰間として生活していた。

芳町色街に多数存在する陰間茶屋の一つ、薄迦園（はっかえん）に籍を置く童・琥珀は、仕事として金を貰い男に抱かれた経験はまだ無かった。もちろん女としたことも無い。

幼い時分に売られて来てから、様々な教育を施されてきた。
店主・弥勒が言うには、
「仕込み無しでは使い物にならない」
というわけで、まずは口の中を磨いて口臭を消せだの、脇の下も肛門もよく洗浄して手入れしろだの、細かすぎるほどの厳しい躾けがなされた。
また、肌をきめ細かくするためザクロの皮を干した粉で体を磨いた。

三味線、鼓、唄、踊り、さらには立ち居振る舞いや言葉遣いも改めさせられ、そして齢十三を越えた今、いよいよ始まるのである。色を売るための夜の仕込みが。

陰間としての仕込みを始めるための準備が着々と進む中、ある時琥珀は弥勒に呼び出された。
「これからはしっかりと稼いでもらうぞ。今までの雑用やらなんやらとは違い、他の皆のように色を売ってもらう。
一応言っておくが、逃げようとしても無駄だから、そのつもりで……」

弥勒も元々は陰間としてここで働いていた。薄迦園の看板を背負っていた美麗な顔立ちは、齢三十の半ばとなった現在でさえ、少しも衰えていない。

先代である彼の父親は養子である弥勒をも金稼ぎの道具として用い、”芳町に薄迦あり”と噂されるほど一気に店の名を押し上げた。
その先代が病に伏せて呆気なく命を落とした後に薄迦園を継いだのが、誰であろうこの弥勒なのである。

「ところで…、」
彼の鋭い切れ長の目で見つめられると、男同士であるにも関わらず身体が熱くなってしまう。ここのところ、琥珀はそう感じるようになっていた。

「お前は女を抱いた経験も無いのか？」
「こんな場所で女を抱けるわけ無いじゃない」
長めの前髪を指でクルクルともてあそびながら、ふてくされたように答える。
「つまりは生息子か……」

弥勒はしばし考えるような素振りを見せてから、怪しい笑いを浮かべた。その顔はたいてい良くないことを言い出す前触れだと経験上知っていたので、琥珀はやや後ずさって構えた。
「な、なに…？」
「お前、女を抱いてこいよ。仕込みはその後だ」
「……？！
そんな簡単に言われても……、」

弥勒は立てた人差し指を琥珀の口元に当てて言葉を制し、低く、しかし強い語調で言う。

「羅生門で鬼に抱かれて来な」

有無を言わせぬ笑顔で言い放った。
「鬼はあんただ」と喉元まで出かかった言葉を呑み込み、琥珀は無言で頷いた。

＊

見世が居並ぶ大通り、酒と女にのぼせた顔があちらこちらへよろける仲之町。人の波に誘引されて、ついつい格子を覗き込む。
「おいおい、お嬢さんがお女郎見立てかい？」
その声に反応し、”彼女”はそそくさと通り過ぎる。

わずか進んだ大見世の前には人だかりができていた。客引きの若い衆らしき男は明るい声を上げながら手拍子を叩いており、その調子に寄せられ、思わず気持ちが高揚した。

「寄ってらっしゃい旦那様、お見立てしてってお大尽！
今宵の妓達（こたち）は餓えて居るのよ、あんたの虎徹で挿せ候（そうろう）！」
どこかで聞いた台詞であるが、客引きの小気味良い声と囃子に釣られ、幾人かの男が吸い寄せられるように見世へと入って行った。

「早くしないと良い妓がみんな売れっちまうよ！
兄ちゃん爺ちゃんお嬢ちゃん、さあさあ誰でも来られませい！！！！」
その文句と様子に魅せられてやや離れた所から眺めていると、勢いづいてますます声を張り上げる彼の袖を引く手が見えた。大見世・松葉屋の暖簾をくぐって出てきた妓夫だった。

「一八っつぁん、いつも手伝わせちまってすまねえな。あんたの客寄せ術は本当にたいしたもんだぜ」
「なに水臭えこと言ってんだ、贔屓にしてもらってるささやかな礼じゃねえか。
この店で働いてる奴はな、花魁も遣り手も妓夫太郎も、皆おいらのお得意様なわけなのよ」
「それは、ちと違うんじゃねえか？」
「細やかなことは気にするねい！」

一八は苦笑いする妓夫の肩をバシバシ叩き、兄貴風を吹かせて豪快に笑っていた。
「それになあ……、」
肩を組みグイと引き寄せ、思い出すような表情で語る。
「今じゃあこうして座敷に呼んでもらっちゃいるが、野太鼓だった時分にゃ、なかなかの苦労を強いられてきたわけよ。
雨の日も風の日も手前が病で死にそうな時も、その日その日を生きるために外で芸を見せる。それは決して楽なことじゃあないよな……」
「……」
「あんただってそうだろ。廓でこき使われ、遊女と客の執り成しをして、さらには暑い日も寒い日も外で呼び込みをしなきゃなんねえ。
苦労がわかるからこそ、手伝ってやりてえんだよ。まああれだ、これはおいらの個我ってやつさ、へへへ」

照れた笑いを見せる一八が可笑しくて、妓夫も笑っていた。
「へへへ、その笑顔を忘れなけりゃ、この先の人生きっと楽しいことがあるだろうぜ。
まったく、二十そこそこの若造のくせに良い顔しやがって。本当は鯖を読んでんじゃねえのか？ちきしょう！」
「いや、俺は……、」

妓夫が何かを言いかけた時、そこへまた暖簾をくぐって出てくる影があった。照れを隠すように一八が呼びかける。
「狐彦の兄貴！
もう帰れそうですかい？」
「ああ、誰かさんが寒い台詞で若い衆を口説いてる間に、しっかり稼ぎを頂いたからね」
「口説いてなんかねえやい！

立ち聞きなんて兄貴も人が悪いぜ、なあ喜衛門？」

再び苦笑いする喜衛門は狐彦と会釈を交わし、幇間『狐座』の二人を送り出した。

二人の後ろ背中を見送りながら一人ごちる。

「寒くなんかねえさ。ここは、いつもあったけえよ……。

……！？」

一瞬、降り積もる雪の中に立ち尽くしているかのような錯覚を覚えた。雪なんか降っていないのに。

「なんだってんだ……？」

似たような既視感は、今までにも何度かあった。これが俗に言う前世の記憶とかいうやつだろうか。

「……はっ、くだらねえ」

心臓の位置をグッと握り、それから、明るい声で呼び込みを始めた。

＊

”彼女”は呼び込みに励む妓夫・喜衛門に近づいた。それに気づいた喜衛門が話しかける。

「見立てか、それとも冷やかしか？」

フルフルと首を振り、問いを返した。

「羅生門河岸はどちらでしょうか？」

「あんた、売られたのか？

……ああそうか、単なる物好きな客か」

そこへ二人が戻ってきた。一八が慌てて松葉屋の中へ入って行く。

「紙入れを忘れたらしくてね。
…おや、君は？」
喜衛門が説明を終えた所へ、一八が出てきた。
「あったあった！かああ、良かった！！　これを無くしたら明日の飯代も払えね……、
おお！こりゃまたべっぴんな嬢ちゃんじゃねえか！！！
なんだ、どうした？」
「騒がしいよ、一八……」

狐彦は息を吐いて、”彼女”に向いた。
「羅生門河岸はこの裏手の方にあるよ。鬼に喰われぬよう気をつけませ…。
あと、連れが失礼なことを言ってすまなかったね」
「おいら失礼なことなんて言ったかな…？
嬢ちゃんよ、女を買うのか男を探すのか知らんけども、行くなら羅生門河岸より西河岸の方が良いんじゃねえかな？」

狐彦がその言葉を制す。
「それはこの”お兄さん”が自分で決めることだよ」
「へっ？”お兄さん”……？！」

紺色と深紅の琥珀織、女物の艶やかな着物を着た、一見すると幼い遊女にも見える美麗なその童は、科（しな）を作って一礼し、去って行った。

＊

遊女三千その他もろもろ約一万の人間が生活する東西百八十間、南北百三十五間の方形の土地、お江戸花街・幻想吉原。
その周囲は、足抜けや踏み倒しを防ぐことにも一役買う、通称”

お歯黒どぶ”と呼ばれる堀で囲まれている。

吉原は岡場所や宿場の女郎屋に比べて高級であり金もかかるが、そのぶん容姿も器量も良く教養と華やかさを兼ね備えた女郎が夜を明るく彩る、いわば浮世の桃源郷であった。

だが、やはり例外もある。

吉原の西側と東側には、お歯黒どぶに沿って河岸見世が並んでいる。西河岸と羅生門河岸（らしょうもんがし）と呼ばれる地区のその見世は、端女郎が安い金で色を売る最下級の女郎屋であり、吉原の中でもまた別な世界を作り出していた。

中でも酷いのが東側。

仲之町に並ぶような高級遊女屋では働けない女たちが切見世に籍を置き、格子から手を出して客を無理やり引き込む様子から、追いはぎ、または鬼が出没した羅生門になぞらえて呼ばれた東河岸の異称、羅生門河岸である。

教えられた方向へ行くと、二人並んで歩けないほど狭い通りに行き着き、そこでは小さな店が軒を連ねていた。

一軒の見世を格子越しに覗き込むと、額を金槌で打たれたような面の女が火いじりしていた。目が合いそうになり慌てて通り過ぎる。

そこへ別の見世から声がかかった。

「よいよいお嬢ちゃんや、愛らしい顔していんすな。……あれま、坊やでありんしたか。

せっかく来んした、わっちを抱いていきなんし。極楽浄土を見せてあげんしょ……」

死の淵を眺めるような色気ある眼をした、艶美な風情の女だった。

弥勒は「鬼に抱かれろ」と言った。つまりは羅生門河岸の女郎と寝ろ、という意味であろう。
女の誘いに乗って見世へと入って行った。

見世の中には女郎屋特有の華やかな匂いがなく、カビたような嫌な匂いで満ちていた。座敷の畳さえも薄汚れ、たわんでいる。
陽の光が射し込んでいるのにもかかわらずどこか陰湿で、不安な気持ちを起こさせる。

「突っ立ってないで座ってくんなまし。
あら坊や、手が冷えていんすえ。わっちが温めてあげんしょ……」
痩せて骨張った手で琥珀の手を包み込む。その手は、死人のそれのように冷たく乾いていた。

女郎は琥珀の胸元に手を当て、着物の隙間からするりと差し入れた。肩を撫で、鎖骨をなぞり、突起した部分をくすぐるように弄る。手の動きに合わせてビクンッと反応する童の様子を見て、楽しげに笑っていた。

「こちらはどうでありんしょう……」
太ももから足の付け根に向かって指先を滑らせる。
「あっ…、」
と小さく喘いだ時、外から男の声が投げられた。
「鉄砲女郎だ、死にたくなけりゃやめときな」

その声に思わず身構え、女郎を突き飛ばして立ち上がった。鉄砲女郎とは、当たれば死に向かう病、つまり梅毒の女を蔑んだ呼称である。
「あはははっっ！！！
もう少しで極楽よりも綺麗な景色を見れたのに！

惜しかったねえ坊や、あはははははっっ！！！！」

突き飛ばされたままの格好で狂ったように笑う女郎を横目に、声の主を探した。

隣接して建つ、この辺りにしてはやや大きめの見世・空蝉楼（うつせみろう）の中から、再び男の声があった。

「薄迦の餓鬼だろ？

話は弥勒から聞いてる、さっさと入って来い」

やはり一番の鬼は弥勒か…。そう思いながら、琥珀は空蝉楼の暖簾をくぐった。

客はいなかった。それどころか働く者の姿さえ見当たらず、酒瓶を片手に座る男が一人いるのみの見世の中は、ひっそりと静まり返っていた。

「あいにく今夜は皆出払ってるんだ。もてなすことはできないが、堪忍してくれ」

長く伸ばした髪を後ろで雑に縛るその妓夫は、陰間として働いていても良さそうなほど綺麗な顔立ちをしていた。

「まあなんだ、お前も一杯飲めや」

「いや、酒は飲んだことなくて…、」

「馬鹿言うな、餓鬼に飲ませる酒なんか無えよ」

無理矢理持たされた御猪口になみなみ注がれた液体を、諦めて一気に飲み込んだ。

「……ごちそうさま」

妓夫が持つ酒瓶の中身は、ただのお湯だった。

空蝉楼で働く妓夫・六左衛門に案内され、奥の間に連れてこられ

た。いわゆる仕込部屋だという。
実は空蝉楼には弥勒をよく知った女郎が居り、さらにはその女郎は、陰間を仕込むことにかけて熟練した技術を有しているらしい。
彼女と会うことが薄迦流の仕込み始めなのだ、と言うのが六左衛門から聞かされた話の流れである。
言わずもがな、琥珀は何も聞かされていなかった。

＊

その部屋の中には、華美な紫色の着物を羽織った美しい女が化粧台に向かって座していた。
琥珀が現れると女はふわりと微笑み、持っていた紅筆を置いて手を差し出す。その促しに従い、腰をおろした。
仕込部屋に連れて来られた琥珀は、想像していたものとは違う室内の様子にやや驚いていた。
朱色の格子に円窓がついた普通の陰間部屋とさほど変わらなかったが、ただ違うのは座敷の下に土間があり、その奥に小さな浴室が添えつけられていることだった。
「それでは華澄姐さん、よろしくお願いします」
そう言って六左衛門が下がると、姐さんと呼ばれた女は苦笑し、煙管に火を付けてくわえた。
琥珀は三つ指を突いて女に頭を下げる。
「琥珀…です。よろしくお願いします」
頭を下げる琥珀に華澄は紅で彩った目じりを下げる。
「もっとウチに寄りなさいな」

言われておずおずと寄ると、華澄からもツイと顔を近づけた。煙管を一つ吸って、煙を吐く。そして火種を消して何か言いかけた時、先に琥珀が口を開いた。
「弥勒さんを仕込んだのもお姐さんですか？」
「……。
野暮なこと言わはるなあ。あんたはどう思うんよ？」
「……もしもそうなら、ちょっと嫌だ」

一瞬、というよりかなり驚いた様子の華澄であったが、彼女はわざとらしくため息をつき、笑みを浮かべた。
「惚れとるんどすな」
「……わかりません」
「惚れとるのよ、きっと」

陰間に惚れた陰間。それはそれで面白くもあり、関心もあり、何より惹かれる。華澄は目の前の童がどんな人生を歩んでいくのか興味あったが、それ以上の追及はしなかった。

琥珀の顔に触れ、その形を確かめるように指を滑らせた。
「愛らしい顔立ちどすな。緊張しなくてもええのよ。
目をつぶって…、そうよ、おおきに…」
されるがままに触れられる。白く美しい十指が生き物のように顔を這いまわった。

閉じた瞼を優しく覆い、鼻筋をなぞる。唇を爪の先で軽く擦る。
「ちびっと荒れとりますな。潤いがない口で舐められたら、お客はん、痛がってまうよ。
あ…、ちなみに唾液で濡らしても潤いは保てないから覚えとき」
琥珀の乾いた唇をペロリと舐めて、華澄は笑った。

琥珀の眼はしっかりと華澄を見据えるのであるが、彼女のどこかに違和感を感じていた。
白く柔らかい肌に形の良い唇。なんとも抱き心地の良さそうな、いわゆる”男好き”する身体。

そして長いまつげに飾られた大きな瞳…、その瞳に違和感があった。
目を合わようとしてもどうにも視線が絡まないような、気持ちの悪い感覚があった。

「あんさんは、心がしっかりとしてはるな」
その言葉にハッと我に返る。
「目が見えへんからこそ、よく見えることだってあるんよ」
見透かすような瞳が笑った。

華澄は横に置いていた巻物を取り出して紐を解き、床に転がした。
「これは陰間を仕込むための覚書よ」
「……はい」
そこには陰間であろう華奢な身体つきの童が、男たちに組み敷かれたりしている絵が描かれていた。様々な体制でまぐわる、衆道のための指南書とも言えるだろう。

「男は女と違い孕んだりせえへん。ただし、それには危険も伴うんよ」
身体がまだ未成熟なうちからひどく乱暴に扱うと、直腸の裏膜を荒らして痛がることが多くなる。それだけでなく、肛門の筋を切ってしまうとやっかいな痛みに悩まされることにもなってしまう。

男同士の情事の際、受け入れる側の男の一物が固くなってくると自然に肛門の方も締まってくる。その締め付けの気持ち良さに伴っ

て荒く抜き差しすると、後門のふちを擦って筋を切ってしまうことがあった。
「もしもそうなったら、すっぽんの黒焼きを髪油でといたものをつけてやると、よく効くんやけどね」

ニコリと笑う華澄の言葉に琥珀は息をのんだ。
たしかにあんなところに熱り立った男のモノを受け入れるなんて無理だろう。青ざめる琥珀に、華澄は頷いて続ける。
「ゆるりと慣らしていきましょか」
「慣らすって…」
「まずは、これやね」

綺麗に手入れされた人差し指を立てて、ころころと笑った。
あの指が己でも触ったことのない処に入れられるのかと思うと、琥珀は顔全体が熱くなるのを感じた。

「恥ずかしいどすか？」
「……、大丈夫です」
本音を言えば恥ずかしい。だが、陰間として生きる決意をした時に、何があっても絶対に耐えて見せると自分自身に誓ったはずだ。

正面から華澄を見据えて言った。
「絶対にやり遂げますので…よろしくお願いします」
「はいな」
手をつく琥珀に、華澄は頷いた。
「芳町一の陰間に仕立ててみせましょ」

＊

「それじゃあ、始めましょか」

「はい」
「ほら、そこに横になって。うつ伏せでね」
「はい…」
言われるままに横になり、拳をきつく握りしめる。
「膝を立てて腰を上げ…、もっと脚を広げな入らんよ」
「んっ…」
震えながらも言われた通りに脚を開き、恥ずかしさに琥珀は唇を噛みしめた。
「指、入れるからね」
丁子油をたっぷりと指に塗り、琥珀の裾をまくりあげる。華澄は人差し指にさらに油を付け、固く閉ざされた秘所へと押し入れた。
「んっ…、あぁ…っ！」
誰にも触れられたことのない窄まりに女の指がゆっくりと埋まる。自らの肉壁が押し上げられるような圧迫感に身体は震え、知らぬ間に涙が流れていた。
「痛い？」
「……だ、大丈夫…です……、」
奥まで入った人差し指が、穴の内部をなぞるように上下に動く。壁に沿って這う指の動きに、声も出せず悶えるばかりであった。
「んっっ…っ…！」
「息を吐きなさい、力を込めたらあきまへん」
「…ぅぅぅっ……」
体の力を抜こうと息を断続的に吐くが、内側から押し上げられるような感覚を受け、逆に力が入ってしまう。
油がじわりと中に広がり、指が動いた跡を焔が追いかけているか

のような熱さを感じた。

華澄は化粧台の引き出しから小さな包みを取り出した。包みの中には粉があり、それを口に入れて唾液で溶かしたあと、琥珀の肛門にたっぷりと塗りつける。

潤滑剤・通和散の効果でトロトロになった穴の中へ、再び指を挿し入れた。

うつ伏せになって必死で堪える琥珀の肩口に、指をそのままにして覆いかぶさり、なまめかしい声で囁く。

「気持ちええやろ…。同じように責めてやれば、お客はんもこんな風に濡れてくれるんよ……」

「濡れ…て……？」

太ももにぬめりを感じ、剥き出しになっているそこをみると、知らぬ間に己の中心からも蜜が滴り、いやらしく汚していることに気づいた。

そして…、

「今日はとりあえず終わりよ。

初めてにしては良くできた方やわ、えらい子や。

あとは……、」

華澄はそそり立つ琥珀の一物を握り、先から溢れる蜜を塗りこむように撫でた。触れられるたび、身体全体が小刻みに震え、切ない声が漏れる。

「挿れる喜びも知っておかなあかんわね」

勃起したそれをさすりながら、震える童の体を後ろから抱きしめて髪を撫でる。

「…お姐さん……」

力の入らない腰をなんとかひねり、童は女郎の胸に甘えるよう縋

った。

＊

化粧台の前で髪に櫛を入れる華澄の隣で、琥珀はいそいそと帰り支度を整えていた。そこへやって来た妓夫・六左衛門。

彼の手には盆があり、その上には粥が入った皿と空の湯呑み茶碗、そして酒瓶が乗っていた。

「よお、お疲れさん。

残りもんしか無えが、帰る前に食ってけや」

盆をドンッと床に置き、酒瓶から湯呑みにトクトク…と良い音で注ぐ。

六左衛門が運んできて、彼が”残りもん”と称した粥は、明らかに作り立てであることを示す香しい匂いと湯気を、室内に満たしていた。

「いや、そんな……、」

遠慮しようかと悩みつつ視線を動かすと、ニコリと微笑む華澄の顔が視界に入った。目が見えないはずの彼女と、初めて目を合わせられた気がした。

その途端、先ほどまでの情事が鮮明に思い出され、顔を真っ赤にして視線を逸らす。

「い、いただきます！」

湯呑みの中身を、喉の奥へと一気に流し込んだ。が…、

「 ？っ……、ゴホッ、ゲホッ……！！！

……？！

六左衛門…さん…、これってお湯じゃ……？？！」

思わず咳き込み、涙目で六左衛門を見上げると、彼は満足気に笑って言った。

「馬鹿言うな、大人に飲ませる湯なんか無えよ」

その言葉を受けて琥珀は気恥ずかしい思いを抱きながらも、湯呑みの酒を改めて飲み干した。その味は苦く、少しだけ甘かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8244y/

吉原幻想(仮)

2011年12月13日07時47分発行